

花明柳暗 : 雑録

著者	腕白坊
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 9
ページ	2 8 - 3 8
発行年	1900-06-05
その他の言語のタイトル	花明柳暗 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/5562

吾人は既にシロンとドラヨールとを云へり。花の如き月の如き亞典人は情によりて起る情によりて亡びたり。石の如き鐵の如きスバル人は血によりて起る血によりて倒れたり。一利一害は元より數に於て免れざる處なるも、世界の文明史上に遺したる儼業何ぞ雲泥の差違あるや。

かく云へばとて吾人は伊勢、源語を以て世界の交明史となすものに非ず、又道德經となすものに非ず。而て又光源氏在原業平を以て眞平人間の好模範となすものに非ず。吾人は素より姑息の情は身を誤るを知る。

聖賢の女房小供を可愛がるも凡人の女房小供を可愛がるも愚愛に二つはなけれど凡人は愛に溺るゝが故に愛に溺るゝが故に溺るゝが故に色に溺るゝが故に色を以て身を喪ふ然れば智仁も甚だしく行はんとて智仁に溺るゝ時は害あり宋の襄公が敵の不意を打たずして夥多の兵士を失ひたる類是より義信も甚だしく義信を行はんとて義信に溺るゝ時は害あり尾生が女子と約束して橋に抱き着きて死したる類是なり。

吾人豈に多く云ふを要せんや。情によりて情に溺るゝもの、豈に光源氏と業平とのみに限らん。吾人今此篇を終るに臨み只一言以て此章を結はしめよ。石姫は石を抱いても尙慈母たるの情を洩らし、三年師の場に結びても尙至情の禁する能はざるは人が萬物の靈たる故ならずや。醜美目に依り清濁耳に従へばとて、深山巖窟に汝の耳目を毀損して遠く好惡の境を離斷せよとは吾人はその不自然不道德の極なるを知る。情は神聖なり。至高の情の動く處は即ち不言の真理なり。舜の無爲にして化すと云ひ、刑措いて用ゐざる四十年といふ、其の能く茲に至らば又道德と法律とを要せざる也。男子世に處す須らく思を皎月の清きに比え肉慾以上に汝の情を發揮する目的と方法とを誤る勿れ。

黃塵萬丈、流石は都の事なれや、車引く音、人叫ぶこそ、日夜窓外に喧まぐ、一夜蓬窓に横りて、山村落花の景を夢みしより、大徹悟召されま都のわか様、フイと僞偶を飛出して、行雲流水の行脚僧となりぬ。野邊の草花摘まむとて、山里の落花にあてがれむとて。

春牛よく語り、眠花よく笑ふ。童顔呵々たる春牛が笑談に、足の運をねばえず、花よ鳥よとわけもなく戀まがるも、流石は花鳥につけ、情なほき僞男やとはゑまれぬ。花の香盗みて、フワリと吹来る春風、心にくやと振かへれば、見ゆる桃の一本、紅の花瓣ねびたしく、竹の籬にこぼれて、時ならぬ玉釵を懸けたる、三春の景色見すてがたくなればえて。

池田より列車に投ず。植木まで僅かに八錢なり。青山を指點して、腰折一つ唸りいでも、聞く人無ければこそ。竹と樵と、ねびたしく生茂りたる、雜木山の中に、珍しく咲出でま一本櫻。美々と見る人のこゝろ、亦美まからぬやは。雲井高く轉る雲雀、菜の花かくれた飛ぶ蝴蝶、流石は春とラなづかれぬ。

植木より列車を下る、これより徒歩なり。鈴一本の外、厄介物持たぬ旅の身輕さ。それとなく吹来る暖風に、征衣の袖ナブラせつ。散れば誘ふ落花の雪も、衣に寒からず。野鷄錦々と鳴いて、山家の桑柘霞ひばかり雪の下草うちもえて、菜花、金蓮芳簇々、野邊の翠拾ふべきほどの景色なれど、自ら都の空にとほければ、華族の嬢さま袖連ね玉ふ風流もなく、さればとて、路傍の花惜まげもなく、手折りて、枝にあつるほどの「ワカラズヤもなく、ヤレ振袖の、ヤレ白粉の、ヤレ辨當の、ヤレ履物の」と騒きたつる心配なく、野花一路、春風に低吟する、馬夫のこゑのみ菜の花に隠れてゆかぬ。思はる植木、山にまぎる雪、さうな旅の風景、美まからぬ春、半開きの花。

塙を繞れる清水に、幽かなる音して、おつるは椿の殘葩か。推せば倒れひする竹の扉、半開き、玄葉ふきの家のゆかまさよ。南軒、背を晒して、仙書よむ翁ありやと差伺はば、見ゆる草木の様々。道ゆく人は足止めても御覽んせよ。柳櫻をこきませて、咲く花の宿と問へば、さても知る人を知る。此のあたりに名高き、ソレ者の住む所と聞くは誠か。雪隠の『トマ』に掩ひたる蕤の上に、こぼれたる殘の紅梅三つ四つ、此所にも佐保姫は宿り玉ふかや。桔槔の高くあがれる井戸側に、米洗ふ女の頬蒙りせる、大さ狗の一つ日向ひきに臥してろびたる、淋きけれぬ田園の詩趣すてがたかり。

知らず幾人か青を蹈む。路のすこゑ窪みたる處、みちもせに散る椿の花赤きを拾ひて、白き糸に繫ぐ小女のあいらしさ。願くはこの小女いつまでも、罪なかれと祈る心、知るや知らずや。一村二村咲ける菜の花の中に、米搗く水車の音ゴトリ／＼眠たげなるも、自ら春の長閑けさ推計られて。路に死したる蝴蝶を見る。練絹のもろ羽摧けて、金彩地に委せり。われはかれを萱花の床に葬り、其の魂天國に、れもむきて、長へに花影に眠れど、いのりて去りぬ。

吞牛頗りに『ウイルヘルム、テル』を説く。西洋詩の味知らざるわれには、耳新しく聞えぬ。吞牛頗る得意の様なり。路二つ合して一つとなる。大さ石と小さ石とあり、小さ石の裂目より、しほらましく匂ふ白すみれをなつかしみ、『根こし來て我が帽子に挟まんとすれば、あわれ草花は、玉の露振ひおとして、かなたに倒れぬ。われは餘りの哀れさに、手を觸れで止みぬ。ゲーテの牧童詩、よみたる心地せり。

垣を髪の如き大道をすくむ。誰れやらの、さまで甘くもなき、『春風一路落花多』といふを聯想せし外、手帳に記すべき景色一つもなし。芝のみ生ひて木立なき山の、我が號に似たりとわらふ。吞

牛の罪なきよ。これも亦旅の一興に數ふべきか。

駿馬牽き來る野人に教へられて、小野神社とやらへ詣づ。小町祭れる祠なりといふ。春といへど、暑さ耐へがたければ、われは上衣を脱して肩にかけ、香牛と眠花とは羽織を頭蒙りにして、傘に代へぬ。さながら達磨の再來なり。路畔の落花ふみて少しゆけば、咲き残りの紅梅色褪せて見る影もなければ、ソヨと吹く風、蠶豆の春送りて香しく、去年たてられまゝの案山子、いかめしく月矢把り笠に狼藉せる、鳥の糞拂はむともせざる、此君何ぞ仁なるやとはえまる。蛺蝶飛ぶ小田の畦つたひ行けば、道もせに咲く蓮花あいらまゝ、偕は蒲公英のトビくは、若草の中にいる見せたる、何ぞの詩集讀みたる心地すめり。旅は春の事くど、合點まで一軒家の側通りすぎま時、叱々馬を追うて野花一路、香風に歌唄ふ賤が男のこえ、微かなり。けんは四月三日、やんごとなき帝の御まつりとして、軒端に建てられま旭旗の春風を弄する、太平の餘澤この山里にも及ぶかしこまよと、遙かに天の一方を望みて、聖徳をたゞへ奉りぬ。こも亦太平の民なればこそ。

路は轉じて山林に入りぬ。その昔ある友が Goethe を誤りて『マキアラー』と讀み、Macaulay を生嚼りして、『マキアラー』と發音せし失錯談に、腹かゝへまも幾度か。春鶯香々の中、僅かに雲仙の緑髪を指えて、詩神の長へに無垢なるを悦びぬ。路別れて二つとなる、同じほどの大さなり。案内者もなければ、問ふべきたよりもなし。道芝の上に坐りて、小町の神托うけよと洒落れたるも、人聞かは腹の皮『ヨラス』べし。足跡しげき方をよかるべけれどて右を取る。松とクスギと、椎と榎と、飛び／＼に生ひし外、珍らしきものなま。鶯にもあらず、山雀にもあらぬ鳥の鳴音おもまるとて、小石投つけまに、『チー』と長鳴して飛去りぬる、その翼は白くしてその頭は赤かり。何處いふ鳥

なむぬれの問へば、アノは開古鳥だといふ。春は開古鳥とは妙ならずやと詰られて、歳事記見たる
 へと言ふ。よまゝ、別らずば別らずに置け、オッソの事石無鳥もたもしるからずやといふ。興あり。』
 小高祠一つ小高き山腹に安座せるが、小町神社なり。神前に額づきて、しかつめらまゝ祈禱せしむ
 れ等が心わつて見たや。マサカ小町の如き麗偶、得させ玉へと願ひえにもあらざらまゝを。葉素の
 額苔深うまで、よくはわからず。我れは亡國大明神と讀み、吞牛は七福大明神と故事のけぬ。後には
 で聞けば、七國大明神との事に、我れも渠れも大にへこみぬ。石階の左右、岩石峨々たり。これ、
 地質學者ならば、何の質、何の結晶など入釜まゝき事いふべけれど、流石は礦物學一冊も讀みえざ
 るだけありて、さる不風流の事せざりまは、うれまかりき。

茶店あり軒傾きて苔蒸せり。宿なから見る秋の月、たのしからぬにあらねども、時雨も露もなま
 らずては、冬の夜の夢、圓かなるべまともおぼえず。老嫗の汲出す澁茶一椀。うすけれど情はこ
 もれり、杏花一樹、庭前にはゝえりる風情あり。あはれこの嫗、歌の一つも詠まゝしかば、小町が
 流とも見ゆらむものと、都雅心なきわれにさへ、口惜しくおもはれぬ。

紫の一本故に、武藏野の草は皆からあはれと思召されま、帝もたはずどかき。聞かむ、花のゆかり
 の小町が果て。出来べくば語りて呉れまじきやと問ふに、文よみ玉ふ御身等こそ、知りもま玉はぬ。
 われ等風情の知る事かは。されど小町さまが流浪の後、この地にて餘生を送られま事だけは、
 人の物語に聞きて侍りて、ボンと叩く烟管の雁首、ホクリもけて灰だらけの火鉢の中に落ちぬ。
 小町が水化粧せま泉といふは、茶店の前にあり。清からず、濁れり。きのふの雨に散りま櫻、池の
 面に浮びて流れもあへぬ花の柵せきとめま、これのみは心ゆかま。こゝを立ちて石もなく高低も無

き道、驀地にすゝみ、それより小道に入りぬ。畦畔に沿うて行く河あり、合志といふ。砂のみ白く、
的礫せり。花水橋頭行人たえ、汀に連れる柳の糸、裊々として眉漸く伸び、蹈めばくづれんする土
橋の下、落の花一輪白く咲きて、巷の塵に汚れざる、淋しけれど、山里の春見せがほなり。

堤畔につたひて下る事六七町、水は竹を遶りて佩環曼玉、野花殘摧して紅白皆空。飼馴の馬春草の
中にたづみて、淋しく晚風に嘶けど、秣ふ童何地行きけむ見えず。

夕べの風にふき飛ばされて、雀の落ちたる麥畝を隔て、古蒲團干せる竿の先に茜さす入日、鮮か
に舞まれたるよ玄。遠郊近村の平田緑野、濶然とて十字形をなせる間より、遙かに、鞍が岳の青
鬘を指す。巨人の如き旁嶂、眉睫の間に屹立して、天を擎げ、稜層の巨峰とはく翠微に入る、樂し
さかな暮山の景、世をあけて皆觸れるも、此の山獨り無垢なり、清淨なり、詩神長へに去らず。

八峰岳、峰尖分岐きて劍戟を連ね、截然屹立きて八葉大の屏風を建て、金泥を詩きたるが上に、臘
脂を流したらむが如き彩雲、山腹にかゝるや、神女鹿車に伴はれ蹠蹠とて、靈府に還行し玉ふ。三
人筇を揮ひ、空を劃して快と連呼す。(作者申す。此あたり扇頭小景を見玉へ)

五時平嶋につき、大田屋といふに宿る。一夜の夢を結ばむとてなり。河あり、橋あり、柳陰釣を垂
るゝによし。まづ浴場を見舞ひ、歸りて夕餉を終り、樓上に横りて水面を望む。星槎一片、漢霄を
すべりて、落ち行く先は何地、春潭水落ち、橋畔月烟の如き。吞牛眠花、用事ありとて出で行きま
あとの淋しさ、春燈挑げて、二十八字詩五つ計り併べけれど、思ふやうに行かず、マ、よ何とでも
なれど、ゴロリ横になりて見たれど、水聲枕頭に通ひて夢の心地穩かならず。ボックツトの中より、
近松戯曲ひき出きて、天の網嶋を讀む。可憐なる『おきむ』が性格に、同情を表え、獨り花影に行き

て泣きけるも、見る人なければこそ。歸りて樓頭の曲欄にもたれ、無象の天を眺めて、瞬く明星の數をかぞへしが、それも暫き、壁上にうつる我が影の瘦せたるを倪みて、横になりぬ。夜ふけて燈心の吉丁子結ぶころまでは、木枕慣れぬ頭の痛かりしが、結びき夢は向ひの酒樓の、三味大鼓、黒漆の蒔繪の遠枕よりれそらくは、清かりし。この日行程七里。

翌る朝、床の中より欠伸し乍ら臂を伸べて、わざとらき横窓開くれば、春山寫まいだす紫の雲一朵、一きは一きは誰か染めけむ。色濃きつばすみれ。それよりは、美しかりき、襟先の手水鉢に照す朝日子の影、ありくど拜まれしにおどろき、蒲團はねのけ飛び起さつ、朝飯六七杯つめこみて、あきれし下女の顔、オタフクに似たりと、笑うてのけぬ。

それ御客様の御立ぞと、宿の小女ばたつかせ、七時二十分平島を出づ。一夜のかり枕なれど、又名殘惜きからぬもあらず。此の地、靈泉沸きてより僅かに三星霜、昔々禾黍空しく秋風に動きき所、今は化えて紅欄酒海の區となり、酒樓の絃聲、日々都門の塵を呼びて来る。されど開湯の日未だ淺きだけありて、比較的、蘭麝の香りうすく、宿賃もさまで高からざりきは、一概に惡口言ふまじきか。

香風一路、飛花舞蝶、春自ら長閑なる小道、何となくうれしく、青を摘み翠を拾ふ村娘の袖なつかしく、町路四里、菊池まで一飛と意氣込みぬ。

吞牛が快談例によりて盡さず、自慢話となり、失錯談となり、滔々説き去つて懸河の如き。一圓もつて宮島旅行にシクワリシ事、一文なしに萩見物に閉口せし事など、都合よく尾翼をつけて、おもしろく、をかしく人の頤解かめたる、流石吞牛ならではと、うなづかる。眠花黙して言はず。我

れは只香牛が罪なきを悦びぬ。

風を截つてこゑあるは松か、石をうつて韻あるは水か。いさゝ小川の白菫の花流し行くさへ興あるに、野花一枝、崖下にくつゝ折々水化粧る様、中々見すてがたき。橋畔に立てる春柳二三條、枯木の間より新まき盾伸したる、俳句にて見た様なる景色なり。

竹の籬に三四本、色見せてホウケタル桃。風には雪ども狂ふべき麥畝の真中に影うすき梨二本。これも亦春の錦に入るべきかどれもへば、捨てかたかり。近頃嫁したる女の皓齒新に涅えたるが、眉だけは鮮かに拜まれたれど、顔は猿ども見まがふべき程の黒さ、ナラバこのあたりの炭焼男行事頼みて、左團扇揚げもらひたき心地せられぬ。

遙かに横臥せる春山を望む。例へば新に浴したる女の肩刺りたるが如き、東西に連亘てうねりくたる一帯の青山、紫雲一朶長へに屯して流れず。やがて山岫とおぼしき處より、綿を紬ぎ出えたるが如き雲の村々と薄さいで、先の紫雲を掩ふと見えしが、果ては『ウスボケ』の色と變じ、終に葉鶏頭の色となり、翠嵐一時に飛び來りて吹き拂ひし後は、夢の如き青山、新まき眼眸の中に落ちぬ。』新しく葺きかへられたる、藁屋の左妻より、微かに一簇の白雲を指す。これ菊池の櫻花なり。我が意頓に振ふ。黄き菜穂と、青き麥との間に、囀づる雲雀のこえおもえろく、耳を掠めて飛ぶ羽蟲の音あいらしく、さては雲の色の見榮ある、若葉の匂のなつかまき、心なきわれにさへも中々うれしかりき。

午後一時隈府につく。餘りに渴きたれば、街側の茶店に立ちよりて、濃茶に腹をこしらへ、再び行を起して菊池神社に詣でぬ。眠花切にかれが知己の宅を叩きて、晝食を終へんと主張せしが、香牛

氣の毒がりて聞かず。田舎に似ぬ賑の只事ならずと問ふは、一年に一回の招魂祭なりといふ。誠や神武天皇以來の大混雜打てや大穀、吹けや笛の、節ねもしろく、ヒーヨロの調子に合せて、舞ひ出す神樂の一曲、古風とやいはむ、新奇とや評せむ。右往左往、立ちつ、伏えつ、かきつ戻りつ、する様の見苦まざ。例へば新年の萬歳に似て、それよりも奇怪なりき。我れ等は目も呉れずして、行きすぎぬ。

神社は山頭にありて。大ならず、小ならず、華ならず、穢ならず、瀟洒を極む。武光の靈を奉り、往古菊池家本城のありし跡なりといふ。おもふ昔ぞ、建武延元の頃、東海の鯨魚浪を蹴りて、白日鷹淵に沈まむとせし時、山を負ひ鄧を扣へ、東西を睥睨せよ九國の一大巨鎮、戎馬一度關山の雲に嘶てより、定めなき世に傾かぬ柱はなきに、隸蓼莽とよ北風に向はず、血刀を筑水に洗て、回潤を既倒に挽回する事とも幾春秋。衣手寒き秋風に、連錢韋毛の馬嘶かせ、星と閃く白銀甲、霜と冴ゆる金拵の刀、英姿爽颯あたりを靡かせよ、菊池一家の門葉殿原、此の本丸につきて、軍の門出めでたかれと祈りつゝ、銀燭燦とよて晝の如き處、日の丸の軍扇さつと押し開き、歌ひ出でけむ古調の一曲、尙故老の口より口に傳りて、その者の耳に残れども、歌ひけむ人今何處、大和田の一戰刀折れ矢彈きてより、馬の蹄の立場を失ひ、潮の如くよせ來りよ賊軍、蝗の如く墜壁に迫れば、あな無殘芳蘭摧け、菊花飛び、血痕長へに谷間を濕し、蓬蒿空しく旌竿の跡を埋め、斷腸の行客をよて千行の紅涙を一基の土饅頭に。濺かしめしも、幾年か。後人祠を建て、僅かにその遺跡を湮滅に存すといへども、雨の朝風の夜は男叫のこえ、今尙松風に恨をよするとかや。

神前に踞して首をたれ、公が千秋の英魂を慰め奉りて、坂を降りぬ、茶店あり、その老婆客を呼ぶ

に妙なり。鈴にもたれて、櫻花を觀る。一山全く白雲の中に埋もれ、風無きに散る素葩の様、ゆかまげれど、あまりの難題に俗化せられし心地えて、ありがたからず。老榎あり、征西將軍手植の神木といふ。『勿剪勿折將軍手植之樹』と、我が郷詩人の句まで聯想せられぬ。老幹嵯峨、碧蘿全身を包み、蒼苔蓬々半空より垂れて、髪の如き。馬場先きともればまき處、高等小學校あり。男子部に比して、女子部の壯麗を極めたるには、一駭を喫しぬ、これより町つゝきなり。眠花知己の下に到り、吞生去つて平嶋に歸る。我れ獨り、吉原屋といふに草鞋の紐を解きぬ。

我が一夜の新天地とえて與へられたるは、八疊一間の二階なりき。案外に汚くして、うす暗さには疳癪に、さわりたれど、一夜の事なれば、我慢えて横になりぬ。夕食まで未だ間もあれば、町内散歩して見むとれもひたれど、痛、疵れたれば、浴に入りて歸りぬ。

半夜鈴を携へて、獨り櫻花を觀る。殘月依微とえて、影尙櫻雲の間にあり、仰けば星斗欄干空に萬顆の珠を垂れたり。風なきに亂るゝ花は、雪かみぞれか。白妙の花摺衣、拂ひもあへず、獨り樹下にたぐすむ心ゆかまき、ナラバ、此のまゝ吞まず、食はず、花を主じの一夜の假寢も、ねもしろかるべしと、臍を固めて横になつては見たれど、殘念乍ら御腹がすいては風流所でなま。ジャレも、洒落も、鼻の下がひぬ迄の事と、獨り合點して、立ちあがる折しも、夜嵐一時に掠めて、吹雪にあらぬ落花の枝を誘ふや、雪達磨のそれならねども、我が骨は、舍利と化し、此の山中に糞袋を白盡せんかどねもはれぬ。宿に歸りて蒟蒻蒲團にもぐり込み、仰け様に倒れて寢ねぬ。夜半夢しばくやぶれて家山をたもふ。蓋し食うすければなり。

早寝と寝まひしに、目覺めま頃は、案外に遅かりき。何時だぞ問へば、十時といふに、驚天し、

マツク下女をドナリ散らし、僅かに拾五錢の茶代に巾をきかせ、ありがたうの聲聞き流にきて、宿を出でぬ。此の儘立ち去らむも、名殘惜まければ、事の序に正觀寺に詣でぬ。

寺畔、麥茸々春風に伸びて、土筆の如き穂出たるあはれ深き。武光武政の孤墳に哭きて、千載の偉人空しく忠魂を、笠毒の中に埋めたるを思ひ、一枝の殘花を手向けて、滿腔の紅涙を瀝ぎ、願くは此の涙地下の白骨を濕せど、祈りて去りぬ。あゝ青山の春風、又秋雨茸々たる竹、空しく金殿の夢を片碑に銷し了りてより、五百年。昔を今になすよきもなき古跡に向ひ、當年の英雄、何處にあるかと問へど、啼鳥徒に愁ひて。語らず滿庭の落花、人の陥むに委する正觀寺畔、秀麥離々として、箕氏の恨とはにつきじな。

かくて寺を出づ。せめては山鹿なりとも、一夜の夢結はゞやとおもひしも、矢の如き歸心にかかられて止むべからず。短笠空をかけりて、熊本に入りしは四時。破れ草鞋に犬の糞のつきたるに、疳を起し、イキナリはね飛ばしたる半足、今も尙門前の麥畝に、横れるが見ゆ。

三 國 越

錨 山 人

(1)

塀越に差出でたる早咲きの櫻花、一輪二輪、吹くともなき風のまに／＼いさら小川に落ち散れば、流れの水は音もなくさそひ／＼て、春陽暖かなる彼方の森へと急ぐり。

片田舎といへど、此所は、村里にも遠き、幽かなる溪の隈なれば、賤の男らの、其のをめきさへ聞かず、朝たの雨に花はこるび、夕べの月に葉落つる姿の、たゞ静けく、安らかなるは、實に内山